

# 国文研ニュース

No.36  
SUMMER 2014



『小倉擬百人一首』

## 目次

### ●メッセージ

「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」始まる … 今西祐一郎 1

### ●研究ノート

「八戸南部家の読本収集」余滴 …………… 大高 洋司 2  
世界のアーカイブズをめぐって …………… 加藤 聖文 4  
特定研究「中世古今集注釈書の総合的研究」  
—「毘沙門堂本古今集注」を中心に— …………… 山本 登朗 6

### ●トピックス

連続講座「くずし字で読む『源氏物語』」…………… 7  
山鹿積徳堂文庫 …………… 入口 敦志 8  
シーボルトに近づく楽しみ…………… 神作 研一 9  
特別展示「中原中也と日本の詩」…………… 谷川 恵一 11  
平成26年度 国文学研究資料館「古典の日」講演会 …………… 田中 大士 11  
刊行物の紹介…………… 12  
第38回国際日本文学研究集会 …………… 13  
総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況…………… 14

## 「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」始まる

今西 祐一郎（国文学研究資料館長）

この4月から、国文学研究資料館を実施主体に据えた「大規模学術フロンティア促進事業」のひとつ、「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」が開始されました。

これは、人文社会科学分野では初めて、そして目下唯一の「フロンティア促進事業」であり、その意味で単に国文学研究資料館単独の事業ではなく、我が国人文系の大学共同利用機関を統轄する法人、人間文化研究機構のリーダーシップのもとに、国立歴史民俗博物館、国際日本文化研究センター、国立国語研究所など、機構傘下の関連機関との協働が、科学技術・学術審議会研究基盤部会のヒアリングにおいて、強く求められたところです。

昨年一年間は、日本学術会議の大型研究マスタープランを踏まえた「日本語の歴史的典籍のデータベースの構築計画」として文部科学省より準備経費の措置を受け、計画の実施のための改組（古典籍データベース研究事業センターの設置）、特任教員の採用、国内外の研究協力拠点との打ち合わせ、研究者コミュニティへの協力要請などを行ってきました。その間、文部科学省との協議により、本計画について、当初の日本学術会議提案の画像データベース構築にとどまらず、それを活用する国際的な共同研究のネットワークの構築への見直しを行いました。

私たちはこの計画を、国立の大学、研究機関に課された「ミッションの再定義」の趣旨に沿って、大学共同利用機関としての機能強化の最重要課題と位置づけ、法人第3期中期目標・中期計画の柱として取り組んでいく所存です。

国文学研究資料館は、法令に規定された設置目的で、国文学および関連分野の資料の調査・収集を業務として課せられた大学共同利用機関として、設立以来、国文学関連の古典籍の調査収集には、質量ともに堅実な成果を積み重ねてきました。しかし、日本人の手になる古典籍は、国文学分野に限るものではありません。数の上では、むしろ国文学以外の分野の方が多いのです。

今回の「日本語の歴史的典籍」計画では、『国書総目録』

に掲載されるあらゆる分野のおおよそ50万点のうち、30万点の典籍を対象とします。その意味では、国文学研究資料館が本事業に先立ち、十数年前に『国書総目録』の版權を取得し、それをデータベース化して現在「日本古典籍総合目録データベース」としてWEB上で世界に公開している事業は、期せずして本事業の先取りといえるものでした。『国書総目録』の版權取得、そして『国書総目録』の続編というべき『古典籍総合目録』全3巻（岩波書店刊）の完成に尽力された国文学研究資料館の先達の先見の明と努力に感謝しなければなりません。

本事業はその「日本古典籍総合目録データベース」と連動する形で、30万点の全冊画像を提供するシステムを開発し、居ながらにして様々な分野の日本古典籍に接することのできる研究環境を作り出すこと、そしてその成果を活用して国文学以外の領域の研究者をも含めた共同研究を行うことを目指しています。

これまでに、まずは全国20の大学の研究科および図書館に事業、研究の拠点となっただき、昨年度一年をかけて拠点連携会議で事業のあり方を協議し、目下、その推進のための協定の作成を進めています。

そして、共同研究の公募も開始し、本年度後半期からは第一期の公募共同研究が始まります。

それらとは別に、国文学研究資料館が中心となって、本計画の全体を俯瞰すべく「総合書物学」の共同研究も発足させ、その一つとして、医史学分野との共同研究はすでに活動を開始し、本年夏には第一回のワークショップを開催するはこびになっています。

このような本計画の多岐にわたる進行状況は、この国文学研究資料館のニューズレターとは別個に、古典籍共同研究事業センター（本年4月改組）が発行するニューズレター「ふみ」で逐次報告するとともに、共同研究の成果は、学術的な研究報告書にとどまらず、広く一般社会に向けて、ブックレットのかたちで発信していきます。

本事業に対するご支援とご批正をお願い申し上げます。



## 「八戸南部家の読本収集」余滴

大高 洋司（国文学研究資料館教授）

国文学研究資料館基幹研究「近世における蔵書形成と文芸享受」（平成23～25年度、代表大高）では、従来国文研が調査収集の対象としてきた所蔵先のうち、7ヵ所の特色ある個人蔵書について文芸との関わりを中心に様々な検討を試みた。私の所属したのは、このうち群馬県高崎市八幡八幡神社の神官をつとめた矢口家の蔵書を収める矢口丹波記念文庫を対象とするチームと、青森県八戸市立図書館に所蔵される旧八戸藩主南部家資料を対象とするチームのふたつである。

後者は、近世後期の長編娯楽小説である「読本」の善本を多く含むことで知られており、その概要は、すでに平成16～21年度国文研プロジェクト研究「近世後期小説の様式的把握のための基礎研究」（代表大高）の主要な成果である『読本事典 江戸の伝奇小説』（2008）を通じて、広く紹介している。しかし『読本事典』の段階では、正直なところ、南部家の誰がこれだけ多くの読本（全118点）を集めたのかについて考えをめぐらす余裕はほとんどなかった。数多くの読本（後期読本）が制作・享受された近世後期は、七代信房公（1781～96在任、以下同）・八代信真公（1796～1842）・九代信順公（1842～71）の治世と重なり、このうちの誰か（またはその周辺）が読本の収集にかかわっていたことになる。近世小説の常として、読本も一時の娯楽に供されるものではあるが、購入には、原則5巻5冊を単位として、1点につき現在の金額で万単位の経費がかかるため、貸本屋が購入して不特定多数の読者を相手に減価償却を行うのが一般的な享受であり、南部家のように個人が初印本を大量に購入することは異例といって良い。基幹研究は、読本好きの殿様に光をあてる絶好の機会となった。結論は、主要な収集者は、七代信房（またはその周辺）及び九代信順（またはその周辺）である可能性がきわめて高い、というものである。まだ特定するまでには至っていないが、そのように推定する根拠を申し述べてみたい。

南部家旧蔵の読本のうち、現環境での保存以前に虫害・湿害を蒙ってはいるが、テキストとして貴重な初（早）印本を主とする99点（以下A類）の収集者は、七代信房（またはその周辺）と考える。南部家読本の主要な収集者を信房とする見解は、すでに二又淳氏によって公表されている（『南部畔李の俳諧一枚摺』、『八戸の俳諧』展図録、2003）。浮世絵師喜多川（墨亭）月磨、その弟子である戯作者墨川亭雪磨との関わりが読本の収集にもつながるとするのが骨子であるが、私は当初、信房公が藩主退任後江戸藩邸に起居し、「畔李」と号して遊んだ俳諧と、長編歴史読み物

の体裁をとる読本とでは文芸としての方向性が異なると見て、八代信真による収集の可能性も考えてみたことがある。しかし、信真公は長期にわたって藩政に余念のなかった人であり、現在では次のような理由から、A類の収集は、やはり二又氏の言われるとおりの信房の周辺でなされたと考えるに至っている。

A類の特徴は、薄茶色の替表紙、または一部元表紙を使用して、5～10冊程度を合冊し、下小口を中心に、上小口、背の部分、表紙の一部などに整理番号が墨書されていることである【図版1 A類本『椿説弓張月』前後篇下小口部分】。A類の収集は、享和年間（1801～3）から天保6年（1835）まで、後期読本の形成・展開期をほぼカバーする30年余りにわたっているが、信房死去（天保6年5月16日）後、このように整理された読本は全く見られなくなってしまう。A類は、信房公の嗜好と密接に結びついたコレクションと言って良いのである。



一方南部家の読本の中には、A類と異なり、替表紙・合冊ではなく、全ての冊に元表紙が残存し原型を留めるもの（文化期までに刊行の作については後印本が多い）が19点存在する（以下B類と呼ぶ）。この中に、従来特に指摘されることがなかった九代信順の関与をうかがわせるものが含まれているのである。信順は「八代信真の男児の多くが早世したため、天保9年（1838）4月、元鹿児島藩主島津重豪の十二男篤之丞を養子として、信真の娘鶴姫の婿に迎えた」人（当時24歳）である（『新編八戸市史 通史編Ⅱ近世』、2013。大高による要約）。

B類のうち、『絵本太閤記』（南15-31。A類の南15-30とは別のもの）初～七篇の各篇表紙見返し、後表紙左下等に「鯉（印）」・「コイ」の墨書が見られ、『絵本忠臣蔵後篇』（南15-34）にも記されている。また同じ「鯉印」（「コイ」・

「コイ印」は、『絵本三国妖婦伝』(南15-48)・『椿説弓張月』(南15-54)・『南総里見八犬伝』(南15-86)・『新編熊阪説話』(南15-92)の各編各冊下小口部分にも原則として備わっている【図版2 B類『南総里見八犬伝』第三輯下小口部分】。南部家の文書類に当たってみた結果、調度(南1-8)、金銭貸付(南部家文書5-5-1-0-42)、服飾(同5-3-2-0-55)関係の資料などからも、「鯉印」を九代信順(またはその周辺)に関わる符牒と見なすことのできる徴証が拾い出せた。



このように「鯉印」が信順周辺と結びついたことで、『八戸市立図書館国書分類目録 一』に載る書籍・道具目録のうち「御書籍目録 文久三年癸亥年 二月改 御納戸」(南1-4)、「〔南部家備品目録〕」(南1-5)からも、信順の収集関与を推定できるようになった。2種類の目録には、読本の書名と冊数が次のように掲載されている。

【南1-4】『絵本三国妖婦伝』拾五冊・『通俗武王軍談』式拾冊・『椿説弓張月』廿九冊・『絵本太閤記』八十四冊・『同忠臣蔵』式十冊・『同楠公記』三十冊

【南1-5】十八番／十九番／御書物 『絵本三国妖婦伝』十五冊・『通俗武王軍談』二十冊・『椿説弓張月』二十九冊・『絵本太閤記』八十四冊・『絵本忠臣蔵』二十冊・『絵本楠公記』三十冊・『南総里見八犬伝』九篇七十一冊

猶又拾五冊／御下ケニ被相成都合／九十六冊 右一箱  
一 里見八犬伝 九篇七十一冊

〔大高記 南1-5『南総里見八犬伝』上部注記〕  
三月廿一之後／一 里見八犬伝 九十六冊  
三月廿一日／御手許より外二拾冊御下ケニ被成  
六月三日／三河後風土記 四十冊／唐鑑音註 六冊

太閤記 八十四冊／右之通御手許へ差上可被下／御用  
達北町実へ相渡

〔大高記 南1-5に挟んだ貼紙〕

『通俗武王軍談』・『絵本太閤記』・『絵本忠臣蔵(前後篇)』・『絵本三国妖婦伝』・『椿説弓張月』が冊数ともB類本に一致、『南総里見八犬伝』もそれに当たる可能性が高い(『絵本楠公記』は現在断片のみ残存)。南1-4目録は文久3年(1863)の改め、南1-5目録は読本についてはその改訂版と見なし得る。文久3年は信順の治世であり、『絵本太閤記』・『絵本忠臣蔵後編』・『絵本三国妖婦伝』・『椿説弓張月』・『南総里見八犬伝』は、「鯉印」の符牒により信順周辺の蔵書と考えられるから、他の2点も同様と見て差し支えないであろう(引用した注記・貼紙に記された「御下ケ」・「御手許」等の文言は、読書の主体が藩主またはその周辺であることをうかがわせる)。信順が関与したと見られる期間については特定できないが、いちおう天保9年(1838)に養子に入ってから、またB類の読本は他にも信順周辺の収集を含むものと考えておきたい。

以上が八戸藩七代信房・九代信順の読本収集関与についての報告であるが、今回、B類本と信順公との関わりに気づいたきっかけは、資料の下小口に記された符牒「コイ」であった。実のところ、当初はA類の下小口にのみ注目しており、紅林健志・高松亮太・網野可苗三氏の協力を得てチェック作業を行った結果、A類のその他の特徴との一致を確認することができた。しかし、B類の下小口には注意せず<sup>ホンソソジュン</sup>にいたところ、洪晟準氏から『八犬伝』その他にも「コイ」印が備わるとのご教示を受け、慌てて見直した次第である。古典籍のデジタル画像化の進行に伴い、八戸の読本も、表紙や正面見開きの平面画像については国文研データベースで閲覧が可能だが、それ以外の情報は画像からでは得られない。やはり原本に即した調査が必須ということから、今号への寄稿を依頼されたのであるが、その手柄(?)は、挙げてお名前を記した方々のもの、基幹研究では、これ以外にも、若いメンバーの柔軟な思考と行動力に色々助けられたことを付記する(本稿は、拙稿「八戸南部家の読本収集」〈『読本研究』6、2014・5〉の内容を要約したものである。なお、下小口画像の掲載についてご高配をたまわった八戸市立図書館に、厚く御礼申し上げます)。

# 世界のアーカイブズをめぐって

加藤 聖文（国文学研究資料館助教）

昨年度まで若手研究（S）「海外引揚問題と戦後東アジアの地域変動に関する国際的総合研究」を5年間にわたって行ってきた。この科研では、第二次世界大戦の敗戦によって起きた海外在留日本人の引揚を国際関係の視点から解明するため、国内外にあるアーカイブズ（公文書館）に所蔵されているさまざまな文書記録や写真などの映像記録といった歴史記録（こちら英語ではアーカイブズと呼ばれる）の調査・収集・分析が柱であった。

というわけで、アジアからヨーロッパ・北米にかけてさまざまなアーカイブズを活用したのだが、同じアーカイブズといってもそれぞれのお国事情を背景にした「個性」を持っているので、実際に使ってみると驚きと感心の連続であった。そこで、せっかくの貴重な体験を独り占めするのはもったいないので、この紙面を借りていくつか紹介してみたい。

世界的にアーカイブズ制度の完成度が高く、時代の先端を行っているといえるのは、英国立公文書館であろう。ここはいつ行っても閲覧者（研究者だけではなく家系探しの一般市民も多い）が一杯で、利用者の多さでは米国立公文書館と双璧ともいえる。ただ、アメリカよりもシステムが進んでいて、公開文書はすべてウェブ検索可能で、事前にウェブから資料の閲覧申請をして（海外からも可能！）、しかも席を事前に確保できるし、翌日も使いたい場合は資料をキープできる。アメリカのように申請だけで半日かかったり、朝早くに行って場所取りをしなくてもすむので、調査は非常に効率的に行える。

イギリスのような合理的なアーカイブズ・システムはオーストラリアやカナダなどの英連邦諸国でも広まっているが、それに比してアメリカは合理性と非合理性の混在型といえる。アメリ

カの場合、意外ともいえるが、目録データが完備していないため、ウェブでの検索ができないところが多い。米国立公文書館は世界最大のアーカイブズであるが、所蔵量が多すぎるので、いちいち文書を整理して一件一件のデータを探して…というような悠長なことは不可能である。それより検索は多少不便でも、とにかく利用できるようにすることを最優先にしている。これも一種のアメリカ的な実用主義といえようか。

こういったシステムはアメリカの大学でも同じで、そのなかでもイエール大学パイネキー図書館は利用最優先を先端的に実践している機関といえる。イエール大学には大学アーカイブズがあって、卒業生や教員などイエール大関係者の個人文書や大学の業務文書が所蔵公開されているが、その向いにあるパイネキーは世界的価値のある貴重書や個人文書を収集して公開している。ここでは、収集から整理を経て公開にいたる作業行程をアーキビスト（大学院修了以上の高度な専門知識を持ち、しかも全体のマネジメントも担う）の完全分業制によって短期間に実施することで有名である。例えば300箱の資料であれば、2ヶ月で目録のオンライン公開まで行うのであるから驚きである。とはいってもアイテムレベルごとの細かい情報が載った目録ではなく、ざっくりとした大まかな情報だけであるが…。それでも利用者からすれば十分で、なによりも早く利用できるのが嬉しい。

所詮、目録は検索ツールでしかないのだから、日本でよく見かける細かさすぎる情報記述（とくに長すぎて論文のような解題）が満載の目録は、それこそ「ガラパゴス化」しているし、そのために公開が遅れることは本末転倒であろう。

世界のアーカイブズ―例えば、ス

ウェーデンやドイツやイタリアでは、ウェブではほとんど資料の検索ができず、現場に行って目録（極めて簡単で大雑把）を見て、さらには現物を出してもらって、中身を確認しないと何があるかわからないケースも多い。欧米のアーカイブズでもっとも重視されているのは、利用者への「公開」であって、より効率的な利用環境を整備することが最優先とされている。

そんな貧弱な検索手段では、むしろ利用者に不便をかけるのでは？と疑問に思うかもしれないが、窓口対応できないような専門性の高い要求があった場合には、アーキビストという専門家が登場して問題を解決してくれるのである。米国立公文書館の場合、普段に我々が接するのは事務職員か学生アルバイトだが、探している文書が目録でもなかなか見つけれない時は、彼らが鎮座している「奥の院」に案内されて、ご託宣を拝聴することになる。欧米では、膨大な知識を持つアーキビストが資料のナビゲーターになってくれるわけだ。しかも、彼らは概してとても親切で、こちらのトンチンカンな質問でも実に丁寧に答えてくれる。

とはいえ、世界がこんなに効率的なシステムで整備され、物わがりの善くて親切な人ばかりでは、刺激も無くて面白くもない。当然、きわめて非効率的、おそろしく閉鎖的である国も存在するし、そんな国のアーカイブズは緊張感200パーセントを思いっきり体感することができる。

大学院生時代から中国のアーカイブズ（中国や台湾では檔案館と呼ぶ）を利用しているが、とにかく人間関係も絡んで何から何まで非効率的であるし、その時々の日中関係にもろに影響されるので、調査はちっとも進まない（上海市檔案館だけは唯一の例外だが）。東アジアでは、20年くらい前までは、中国ばかりでなく台湾や韓国で



も同じように閉鎖的であった（日本は閉鎖的ではなかったが、大した資料が無かったのではほとんど使われなかった）。だが、1990年代に始まった政治の民主化の流れで、台湾や韓国はあっという間に資料公開制度が整備され使い勝手が格段に向上、とくにデジタル化が著しく進展して、今では欧米とほとんど変わらないくらい楽に調査できる。

では、中国がダメならロシア！ということでここ数年間はモスクワ通いをしているが、ロシアもさすが一党独裁国家のソ連を引き継いだだけあって、常識（といっても西欧のそれだが…）が通じない点では中国以上であった。

実は、アーカイブズ制度が高度に発展しているのは共産主義国家である。アーカイブズは、情報（公文書も情報の一種）コントロールの主導権を国民か国家のどちらが握るかの問題であって、国民が主導権を握って国家権力をチェックする装置となる一方、国家権力が主導権を握って国民をコントロールする装置にもなり得る。共産主義国家はその後者であって、旧ソ連のアーカイブズ・システムは完璧で、政治家の個人文書も国家のものなので何でも残っているが、誰にも見せないから厄介なのである。

ちなみに、ロシアはボリショイ劇場のような芸術施設や小劇団でもアーカイブズを持っていて、それこそ帝政ロシアの頃の脚本や役者のギャラを記録した書類、さらには小道具まで残っている。他の国では見られないことだが、演出家の演出記録まで残っていて、資料集が出されているほど。意外な細かさは、ロシア人の特性かもしれない。

そんなお国柄なので、アーカイブズは宝の山だが、閲覧室に入るところから難関が待ち受ける。まず、ロシアはアメリカなどと違って国立公文書館が

すべての文書を集中管理しているわけではない。政府の文書は国立公文書館（経済官庁は経済公文書館）であるが、軍事に関するアーカイブズは2つあり、1941年の大祖国戦争前は政府所管の軍事公文書館、以後は国防省所管の中央公文書館となっている。さらに国防省には海軍省公文書館（サンクト・ペテルスブルク）と部外者は寄りつくのも恐ろしい情報総局（GRU）のアーカイブズがある。また、外務省は外交政策公文書館、大統領府（ソ連時代の最高意思決定に関わる文書を引き継ぐ）や連邦保安庁（ソ連時代のKGB文書を引き継ぐ）も個別にアーカイブズを持っている（大統領府や連邦保安庁は外国人がアクセスすることはまず不可能）。その他、旧ソ連共産党と党関係者（スターリンなどもここに含まれる）は国立社会政治史文書館という別組織で管理されている。ちなみに、帝政ロシア期の文書は歴史公文書館（サンクト・ペテルスブルク）である。

これだけアーカイブズが分散していると各機関をまわるだけで時間がかかるが、さらに開館時間や休館日、さらには閲覧申請の方法も異なるので、最初はそれぞれの機関の閲覧証を作るだけでほとんど1週間が終わってしまう。しかも、夏期は職員が休暇を取るため2ヶ月間思いつき閉館するというだめ押しがある。さらに、外務省の場合は事前申込制で少なくとも2ヶ月前にはしておかないといけないし、許可が下りているのかどうか現地に行かな

いとわからず、わざわざモスクワまで行っても許可が下りていなくて入れなかったという不幸なケースもある。さらにさらに、許可が下りる人と下りない人の基準がまったく不明で、先方に嫌われたら出入り禁止になって二度と足を踏み入れられないという悲劇もしばしば起きる。

このような障害を乗り越えて、やっと閲覧までたどり着けても閲覧者用の目録はないので、こんなものを見たいと伝えて、あちらが勝手にセレクトした文書を見せてもらうという受け身の立場に甘んじなければならない。しかも、コピーもデジカメ撮影も禁止、電子辞書もパソコンもダメで、ひたすら写経に励むことになる。

なんでこんなに非効率的で利用者に冷たいのかというと、職員が働きたくないからで、現場では態度に思いつき出ている、ここまで露骨だとかえって親しみすら湧いてくるから不思議である。効率性を求めてますますスピーディになる世の流れに背を向けるようなロシアのアーカイブズは、世界の広さを教えてくれる先生でもある…と達観しなければやっていけない。



ロシア外務省外交政策公文書館  
看板がないので外見からは何の施設かわかりません

# 特定研究「中世古今集注釈書の総合的研究—「毘沙門堂本古今集注」を中心に—」

(研究期間：平成 26 年度～平成 28 年度)

山本 登朗 (関西大学文学部教授)

近年国文学研究資料館の所蔵に帰した『毘沙門堂本古今集注』は、説話的、秘伝的な要素を強く持った中世古今集注釈書の代表的存在として知られているが、量的にも豊富な多岐にわたる記載内容の実態の解明や、卷子六軸という形で伝わる書物としての性格等々、精査されねばならないことがらが多く残されている。

『毘沙門堂本古今集注』は、昭和10年に『未刊国文古註釈大系』の一冊として翻刻され世に知られるようになったが、その翻刻は誤植も多く、また当時はこの種の説話や秘伝を多く含む注釈の性格についても十分に知られていなかったため、注釈書としての研究は進まなかった。研究を大きく進めたのは、昭和48年に刊行された片桐洋一氏の『中世古今集注釈書解題二』であった。片桐氏は、『三流抄』『弘安十年本歌注』など類似の性格を持つ注釈書とともに『毘沙門堂本古今集注』の性格について論じており、その博搜に基づいた深い考察は、現在でももっとも信頼できる達成である。その後、『毘沙門堂本古今集注』は片桐氏の所蔵となり、解説を伴った影印が平成10年に氏によって刊行された。今回の共同研究は、このような片桐氏の研究の成果をふまえつつ、『毘沙門堂本古今集注』が当館という公的機関に入り、原本による直接研究が可能になったことをひとつの契機として、古今集注釈の専門家だけでなく、中世和歌や芸能、物語、説話、また日本語学(中世語、

抄物研究)など、本来の専門を異にする多様な研究者が一堂に会して、幅広くさまざまな角度からこの注釈書を詳細に読み直し、新しい知見を得るとともに、広く中世日本の注釈書のあり方や文化のあり方にまで考察を広げようとするものである。

## 研究代表者及び分担者

研究代表者

山本 登朗 (関西大学文学部・教授)

研究分担者

浅田 徹 (お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科・教授)

大谷 節子 (神戸女子大学文学部・教授)

岡崎真紀子 (奈良女子大学文学部・准教授)

鈴木 英之 (早稲田大学日本宗教文化研究所・招聘研究員)

田淵旬美子 (早稲田大学教育・総合科学学術院・教授)

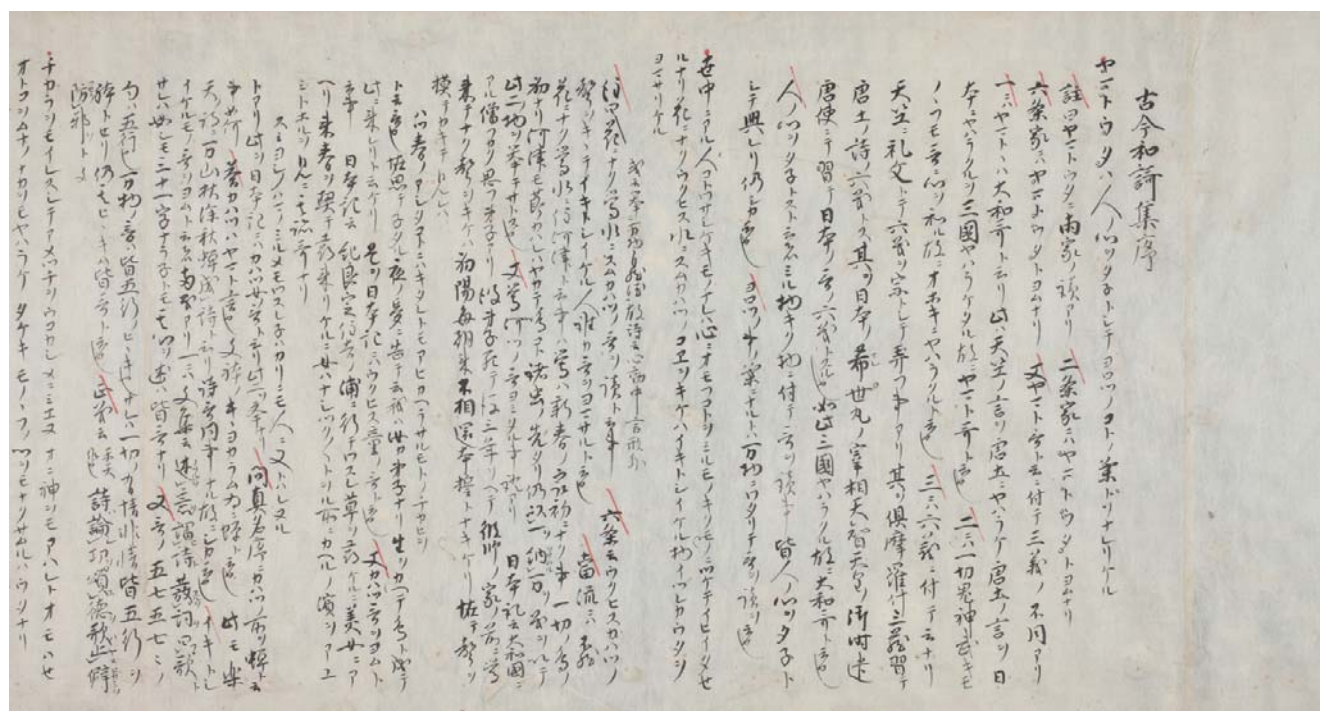
近本 謙介 (筑波大学人文社会科学部・准教授)

蔦 清行 (大阪大学日本語日本文文化教育センター・准教授)

浜中 祐子 (京都学園大学・非常勤講師)

落合 博志 (国文学研究資料館研究部・教授)

小山 順子 (国文学研究資料館研究部・准教授) ※館内連絡者



毘沙門堂古今集注(当館蔵) 仮名序冒頭部分



## 連続講座「くずし字で読む『源氏物語』」

当館では日本古典文学の普及を図るため、一般の方を対象として、今年も連続講座「くずし字で読む『源氏物語』」を開催します。

応募方法等は以下のとおりです。ご参加をお待ちしております。

講 師：今西祐一郎（国文学研究資料館長）

場 所：国文学研究資料館2階大会議室

各 回 時 間：14：00～15：30

開 催 日：第1回 平成26年10月1日（水）  
（全5回）

第2回 平成26年10月8日（水）

第3回 平成26年10月15日（水）

第4回 平成26年10月22日（水）

第5回 平成26年10月29日（水）

※但し、都合により日程・時間を変更する場合があります。

また、天候等により全5回の開催ができない場合があります。

◆申込み方法：定員90名（応募多数の場合は抽選）

ハガキ又はFAXに郵便番号、住所、連絡先の電話番号、氏名（フリガナ）をご記入のうえ、以下の申込み先までお送りください。

◆締 め 切 り：平成26年8月22日（金）

※お申し込みは全5回の講座に毎回出席できる方に限ります。

※講座は、平成25年度と同じ内容を予定しています。

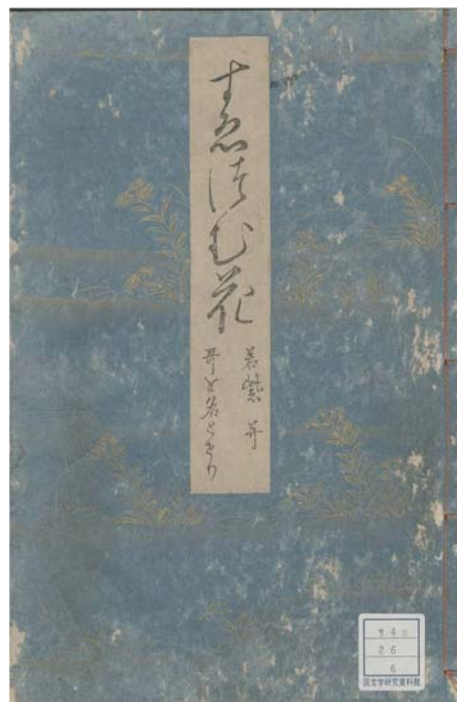
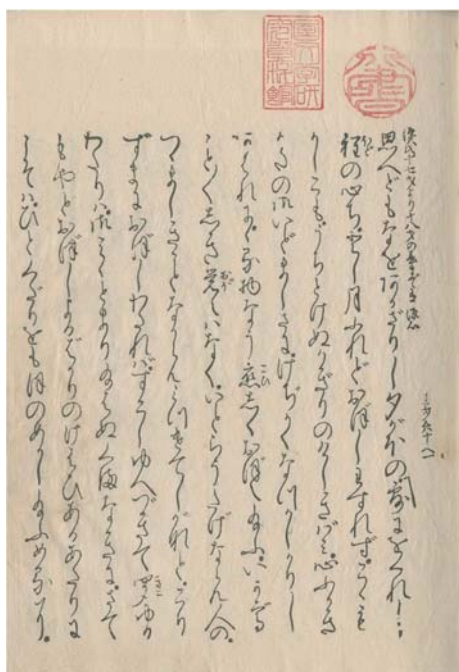
※当申し込みを通じて得た個人情報、連絡業務のみに使用させていただきます。

◆申 込 み 先：〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

国文学研究資料館「連続講座」係まで

FAX：042-526-8604

◆受 講 料：無料



『絵入 源氏物語』江戸前期刊（当館蔵）



## 山鹿積徳堂文庫

山鹿流の陣太鼓をご存じでしょうか。今年平成26年の正月、歌舞伎座での演目に『松浦の太鼓』(明治十五年初演)がありました。平戸藩主松浦鎮信を主人公に、芭蕉門人の其角や大高源吾などが登場する、赤穂浪士の吉良邸討ち入りを題材とする芝居です。題名の「松浦の太鼓」とは山鹿流の陣太鼓のことで、この秘伝を受けたのが、赤穂浪士の統領である大石内蔵助良雄、吉良家に縁の深い米沢藩上杉家の家老千坂兵部、そしてこの松浦鎮信の三人という設定が眼目となっています。その三人の共通の先生にあたるのが山鹿素行だと言うのです。

実際には、「山鹿流の陣太鼓」というのはなかったようで、芝居の上での虚構です。大石良雄の祖父にあたる大石良欽と素行とは赤穂配流時代に親交があったようですが、良雄をはじめ、討ち入った浪士たちとの師弟関係については確認されていません。山鹿素行と赤穂浪士の討ち入りとは直接の影響関係はなかったとされています。しかし既に江戸時代から、山鹿素行の名前は、大石内蔵助の名前とともに人口に膾炙することになります。

山鹿素行は元和八年(1622)会津若松に生まれました。六歳の頃江戸に出て、林羅山に朱子学を、十五歳で小幡景憲と北条氏長に兵学を学びます。承応元年(1652)から万治三年(1660)まで、播磨国赤穂の浅野長直に千石の俸禄で召し抱えられました。長直は、赤穂事件を起こした浅野内匠頭長矩の祖父にあたります。この時は赤穂へは七ヶ月程滞在したことがあるだけで、江戸において学問に専念していました。その後、寛文五年(1665)『聖教要録』を刊行します。これは朱子学とは大きく異なった、独自の「聖教」思想を述べたものでしたので、朱子学を旨とする幕府からにらまれることとなり、赤穂藩浅野家へお預け、つまり配流となります。赤穂配流の間も更に思索を深めていき、『中朝事実』『武家事紀』などを著しました。

配流から九年の後、延宝三年(1675)赦されて江戸にもどりました。浅草田原町の住まいの書齋を「積徳堂」と名付け、学問に励むとともに、門人たちの教育を行います。貞享二年(1685)九月二十六日、六十四歳で没しました。素行の子孫は、平戸藩主松浦鎮信と弘前藩主津軽信政に召し抱えられ、代々両家に仕えています。松浦鎮信が素行と大変深い交友を結んでいたことは事実でした。

この度、山鹿素行の御子孫で、代々平戸に居を構えておられる山鹿家より、素行に関わる1,321点に及ぶ資料群が当館に寄贈されることとなりました。この中には、昭和五十六年に重要文化財の指定を受けた59点の資料も含まれています。

重要文化財に指定されているものは、多くが素行自筆の著作や草稿です。そのうち『中朝事実』は、放伐と異民族の支配によってしばしば王朝が変転する中国に対して、日本の方を優位とし、「中朝主義」とでも言うべき持論を述べたもの。これは素行の根幹となる重要な考え方で、同じく自筆の『武教七書義』などの兵学書においても、この中朝主義が展開されています。他に『修教要録』『治教要録』『武教要録』『治平要録』などの実践的な道徳や政治の要諦を示したものなどがあります。

重要文化財指定のものの中には一点、素行の肖像画が含まれています。これは、素行と親交のあった狩野安信によって描かれたとされており、面影を良く伝えるものと考えられます。

指定以外の資料も貴重なものです。素行自身が所持していた、いわゆる「手沢本」が含まれており、素行がどのような書物を読んでその思想を形成していったかが具体的にわかるからです。また幕府の忌諱に触れた『聖教要録』の門人達による書写本などもあります。

これらの資料を総合的に研究することで、山鹿素行の思想が明らかになるとともに、その後の日本人の思考にどのように影響を与えたのかがより具体的にわかるようになることが期待されます。

長年にわたり、貴重な資料を大事に継承してこられた山鹿家に敬意を表するとともに、今後当館が保管し、資料の活用を図らなければならないことの責任を痛感しています。

末筆ながら、御寄贈いただいたことに感謝申し上げます。(入口 敦志)



図1 『山鹿素行像』(部分)  
絹本着色、一軸。狩野安信筆。

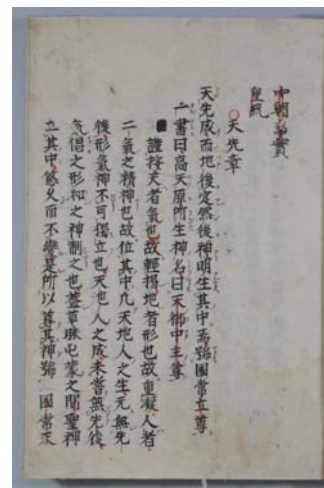


図2 『中朝事実』二冊。  
山鹿素行自筆。

## 【人間文化研究機構主催／国際シンポ「シーボルトが紹介したかった日本」参加報告】 シーボルトに近づく楽しみ

国際共同研究「オランダ国ライデン伝来のブロンホフ、フィッセル、シーボルト蒐集日本書籍の調査研究」(代表: 鈴木淳当館名誉教授) は、人間文化研究機構の「日本関連在外資料の調査研究」プロジェクト「シーボルト父子関係資料をはじめとする前近代(19世紀)に日本で収集された資料についての基本的調査研究」(代表: 日高薫国立歴史民俗博物館教授) のランチとして、2010年度から開始されました(2015年度終了予定)。シーボルトが持ち帰った多種多様な文物のうち、主に書籍を対象として書誌的データを集積し、その目録を編むことを目指しています。

\* 研究経過については、ニューズレター「立川通信」(現在、4号まで発行済)ならびに本誌35号(2014年5月)所載の金田房子「シーボルトの求めた日本古典籍」、本誌32号(2013年8月)所載の牧野悟資「シーボルトプロジェクト海外調査経過概要報告」、本誌22号(2011年2月)所載の鈴木淳「ブロンホフ、フィッセル、シーボルト蒐集日本書籍の調査研究」を参照してください。

論文13本を添えた目録は、まもなく『シーボルトが求めた日本書籍一書誌目録と論文集一』(勉誠出版、2014年12月)として刊行される予定ですが、これに先立ち、人間文化研究機構全体の中間報告として、国際シンポジウム「シーボルトが紹介したかった日本—欧米における日本関連コレクションを使った日本研究・日本展示を進めるために—」が、去る2014年2月10日(月)から13日(木)にかけて、ドイツのボーフム・ルール大学ベックマンスホフ国際会合センターを会場として開催されました。以下はその参加報告です。

首都圏が記録的な大雪に見舞われた2014年2月8日(土)の朝、わたくしどもは成田を発ってフランクフルト・ボーフムへと向かいました。



RUHR-UNIVERSITÄT BOCHUM

### シーボルトが 紹介したかった日本

欧米における日本関連コレクションを使った  
日本研究・日本展示を進めるために

国際シンポジウム

場所: ドイツ ボーフム・ルール大学  
ルール大学ベックマンスホフ国際会合センター  
日程: 2014年2月10日(月)～13日(木)

主催: 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
共催: ボーフム・ルール大学

### シーボルトが紹介したかった日本

欧米における日本関連コレクションを使った日本研究・  
日本展示を進めるために

現在、わたしたち人間文化研究機構「日本関連在外資料の調査研究」プロジェクトは、2010年以降、シーボルト関連資料を中心とする海外存在の日本関係資料の調査研究を進めております。今年で3年目になりました。欧米に数多く存在する日本関連コレクションの所在調査を組織的に行うという先駆的なプロジェクトは、1990年代にすでにヨゼフ・クラウザー氏によって始められ、その成果は2冊の目録として出版されています。しかし、残念ながらこのプロジェクトは、組織的・計画的には継承されておらず、多くの海外の博物館では、日本関連コレクションの詳細な目録の公開が切望されながらも実現するための条件が整っていないというのが現状です。わたしたちは、こうした海外の所蔵機関の状況をふまえ、目録作成のために日本側専門家による調査・研究支援活動が必要であると考えています。

ただし、海外にある日本関連資料は数少ない量であり、すべてを把握することが不可能であることは改めて言うまでもありません。そのため、本プロジェクトでは、19世紀に集めて、購入した時期や経緯がほぼ明確であることによって「標準」資料となりうるシーボルトとモースに関するコレクションについて、可能な限り調査・撮影し、そのコレクションの全体像を把握するための画像付き目録の作成を第一の目標としてきました。

なかでも、ミュンヘン国立民族学博物館に収蔵されているシーボルト(父)の2冊目の来日時の収蔵品を中心にしたコレクションの調査を重点的に行っています。当コレクションは、地図・図説・写本・絵画資料・書籍などのほか、日用品についてもその製品とその素材(原料)および製作のための道具のミニチュアなどまで含めると、多岐にわたる大規模な資料群で、収蔵した時期(19世紀半ば頃)がほぼ確定できるために、日本関連コレクションの製作・使用年代などを確定するための「標準」資料としての価値を持つものです。さらにシーボルトに関する文献資料についても、シーボルト父子の書翰・記録・草稿などの調査研究を、ボーフム・ルール大学・ブランデンシュタイン家・ベルリン中央図書館の所蔵資料を中心に進めています。



またさらに、ほぼ同時期に同じく日本関連のコレクションを形成した、ブロンホフとフィッセル、ならびに、シーボルトよりも少し後のエドワード・モースのコレクション等、その他の近接する時代のコレクションも対象とし、近代に海外で収集された様々な日本関連資料の比較検討を通じて研究することを可能とする、視野の広い日本文化研究を進めております。

そこでこのたび人間文化研究機構では、2015年の最終年度の成果発表に向け、本調査・研究の、一歩の発展を図るため、一度中絶的な取組を行い、今後の長期的な調査計画を構築すべく、日本研究の専門的研究機関を持つドイツのボーフム・ルール大学との共催で、以下の通り国際シンポジウムを開催いたします。

### 国際シンポジウム運営委員会

#### CO-CHAIR

会田幸雄  
レジーネ・マティアス  
久堀島浩

(人間文化研究機構職員)  
(ボーフム・ルール大学東アジア学部)  
(国立歴史民俗博物館)

#### MEMBER

大久保純一  
青山宏夫  
日高 薫  
スヴェン・オスターカンフ  
宮坂正英

(国立歴史民俗博物館/司会進行)  
(国立歴史民俗博物館)  
(ボーフム・ルール大学東  
アジア学部/司会進行)  
(長崎純心大学)

#### SECRETARY

久堀島浩  
レジーネ・マティアス  
テールカ・クロネフェルト  
植松美咲  
田中幸一郎  
山崎裕子

(Contact: bochumsympo@rekthaku.ac.jp)  
(国立歴史民俗博物館)  
(ボーフム・ルール大学東アジア学部)  
(国立歴史民俗博物館)  
(国立歴史民俗博物館)  
(国立歴史民俗博物館)

RUHR-UNIVERSITÄT BOCHUM

Contact:  
Sektion Geschichte Japans  
Fakultät für Ostasienwissenschaften  
Gebäude GB 1/39 | Universitätsstraße 150 | D-44801 Bochum  
Fon +49 (0)234 32-26255 | Fax +49 (0)234 32-14693  
Regine.Mathias@rub.de  
www.rub.de/jg

RUB のしおり



シンポは、エルマール・ヴァイラーボーフム・ルール大学長と今西祐一郎国文研館長、ふたりの「開会の挨拶」とともに始まりました。2日間の発表は全部で19本（これを3部に分ける）。第Ⅰ部は「シーボルトの描く「日本」像—歴史と文化—」（座長はハンス・ビョルネ・トムセンチュリッヒ大学教授）、第Ⅱ部は「欧米における日本関連コレクションの現状と課題」（座長はマティ・フォラーライデン大学文学部特任教授）、第Ⅲ部は「シーボルトの「日本博物館」構想について—日本を「展示」する—」（座長は宮坂正英長崎純心大学教授とウド・ヴァイライスヴェルツブルク・シーボルト協会副会長）。日本語に混じって英語あるいはドイツ語による発表もありましたが、日・英・独3か国語にわたる行き届いた同時通訳と、大久保純一歴博副館長とスヴェン・オスターカンプボーフム・ルール大教授、ふたりによる手際の良い司会によって、シンポは終始穏やかに進行しました。



今西館長あいさつ

国文研からは、第Ⅰ部の中で鈴木淳氏が発表（「シーボルト第一次滞在時蒐集書籍」）、シーボルトの第一次滞在時（1823～30）の蒐書の実態を、書籍分類という観点から具体的に解明しました。シーボルトが持ち帰った書籍類は、言わば日本における文政年間（1818-30）の書物文化の復元にも寄与するものであり、また、既に日本国内では失われてしまった書籍に関する、ある種の「タイム・カプセル」の役割をも果たすものとして興味深いものがあります。

両日にわたった発表は、シーボルトコレクションの地図・絵画・陶磁器・染織品・漆器等々、文字通り多岐に及び、シーボルトの全体像に迫りうる絶好の機会となりました。久留島浩歴博館長による「総括」は、シーボルトコレクションの豊かさを改めて追認し、共有し、そして発信することの重要性を厳しく訴えて印象的でした。シンポのつつがない進行に尽力された、レジーネ・マティアスボーフム・ルール大教授のホスピタリティに深く敬意を表し、充実した時間を多くの研究者たちと共有できた幸せに感謝いたします。

（神作 研一）



鈴木淳氏ほか研究発表風景



集合写真

## 特別展示「中原中也と日本の詩」

近代日本における読書が音読から黙読へと大きく転換していったことは、前田愛さんの研究によってひろく認められているところです。現代では、文学作品の音読は、ほぼ国語の時間の教室においてしか行われていないといっているでしょう。中原中也の詩が持続的に多くの人を惹きつけつづけているのは、豊かな口誦性に貫かれた中也の詩が、教科書に載せられ、教室で声に出して読まれていることと無関係ではないと思われます。

中也という一詩人に焦点を当てて日本の近現代詩史を眺め直すことによって、中也のこうした独自の詩の世界を浮き彫りにすることを目指し、特別展示「中原中也と日本の詩」を開催します。

中也に関する多くの資料を所蔵する中原中也記念館（山口市）は、今年開館20周年を迎えます。中原中也記念館と協同で開催する本展示は、「中原中也の生涯」「中也の代表作を説き明かす」「中也へ至る詩の流れ－明治・大正の詩」「同じ時代を生きた詩人たち」「現代詩の中の中也」の五部より構成し、中原中也記念館が所蔵する中也の詩作ノートなど、多くの貴重な資料をご覧になることができます。

中也をはじめとした日本近現代詩の研究者はもとより、ひろく文学を愛好される方々の来館をお待ちしております。（谷川 恵一）

会 期：平成26年10月9日（木）～11月5日（水）  
休 室 日：日曜日、月曜日 ※但し、祝日は開室  
開催時間：午前10時～午後4時30分 ※入場は午後4時まで  
場 所：国文学研究資料館1階 展示室  
入場無料

※当館協力で特別企画展「中原中也と日本の詩」を次のとおり開催いたします。

会 期：平成26年7月31日（木）～9月28日（日）  
場 所：中原中也記念館（山口県山口市）



中原中也記念館ポスター

## 平成 26 年度 国文学研究資料館「古典の日」講演会

「古典の日」は、古典が我が国の文化において重要な位置を占め、優れた価値を有していることに鑑み、国民が広く古典に親しむことを目的として、平成24年3月に法制化されました。11月1日は、我が国の代表的な古典作品である『源氏物語』の成立に関して、最も古い日時が寛弘五（1008）年11月1日であることからこの日に定められました。日本古典文学の文献資料収集と研究を主事業とする国文学研究資料館も、この「古典の日」の趣旨に賛同し、法制化された一昨年度から記念の講演会を開催しております。

昨年度は、応募者多数の盛況にお答えし、千代田区のイベントホールに会場を移し、開催致しましたが、前年を大きく上回る参加者にお出でいただきました。本年度も、千代田区内幸町のイイノホールに450人分のお席をご用意致しました。講師は、昨年に引き続き、リンボウ先生こと、林望先生にお出でいただき、また、慶応大学の新進気鋭の小川剛生先生もお招きする予定です。ふるってご参加いただきますよう、お願い申し上げます。

日 時：平成26年11月1日（土）13時30分～16時00分（開場：12時30分）

場 所：イイノホール（東京都千代田区内幸町2-1-1）

「霞ヶ関駅」C3出口徒歩1分（東京メトロ日比谷線・千代田線）

「虎ノ門駅」9番出口徒歩3分（東京メトロ銀座線）

講演内容及び講師：

- ・「兼好とは誰か－徒然草の新解釈」 小川剛生（中世国文学者、慶應義塾大学准教授）
- ・「紫上をめぐる」 林 望（作家、国文学者、書誌学者）

聴 講 料：無料 ※事前申込が必要です。

申込方法：ハガキまたはFAXに郵便番号、住所、連絡先の電話番号、氏名（フリガナ）をご記入の上、下記申込み先までお送りください。

締め切り：平成26年10月15日（水）当日消印有効

※応募多数の場合は先着順。受講していただく方には、受講票をお送り致します。

【申込み・お問い合わせ先】

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3 国文学研究資料館「古典の日」講演会担当まで  
FAX 042-526-8604 TEL 050-5533-2910

※当申込みを通じて得た個人情報、連絡業務のみに使用させていただきます。

※自然災害により交通機関等への影響が予想される場合は、講演会を中止することがあります。（田中 大士）



昨年の林先生の講演



## 刊行物の紹介

平成25年度に国文学研究資料館が共同研究の成果を広く社会一般に還元するために出版した刊行物です。

### アーカイブズの構造認識と編成記述 代表 大友 一雄

(株)思文閣出版 2014(平成26)年3月31日発行 本体6,700円+税

本書はとくに重要となるアーカイブズ群の構造的な理解(構造認識)とその表示(編成記述)について、第一編で研究動向や理論的整理をし、第二・三編で近世・近代の多様な文書群をとりあげ実践的な議論を展開します。国文学研究資料館で行われた共同研究の成果です。

### 絵が物語る日本 ニューヨーク スペンサー・コレクションを訪ねて

代表 小林 健二

(株)三弥井書店 2014(平成26)年3月20日発行 本体3,000円+税

本書は国文学研究資料館がニューヨーク公共図書館のスペンサー・コレクションの調査を中心に4年間にわたって行ってきた共同研究「在米絵入り本の総合研究」の成果を論文集としてまとめたものです。

絵巻・絵本に関する最新の研究論文の他に、コレクション案内など、在米絵入り本の研究情報をおさめます。

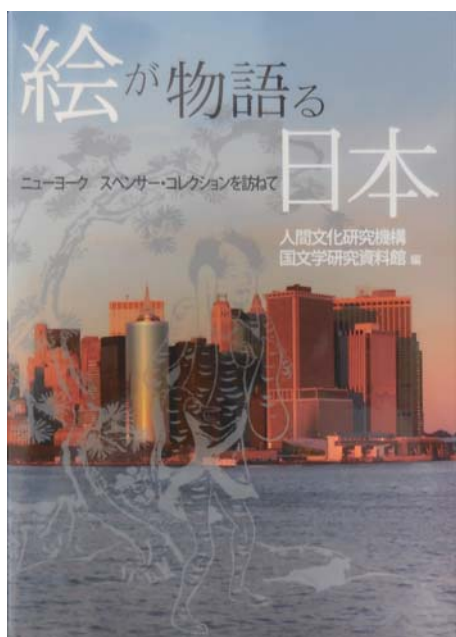
### 図説 江戸の「表現」 ―浮世絵・文学・芸能― 代表 山下 則子

(株)八木書店 2014(平成26)年3月25日発行 本体12,000円+税

本書は近世期顕著に見られた時代的表現に注目し、文学研究を推し進めるには、日本文化全般からの照射が必要との認識に立って、文学・芸能・絵画の境界を外した総合研究です。例えば俳諧「句兄弟」の手法が、山東京伝の滑稽絵本『絵兄弟』となり、浮世絵にも用いられる等、約200点の図版から考察されています。2010～2012年度共同研究「近世的表現様式と知の越境―文学・芸能・絵画による総合研究―」プロジェクトの成果です。



アーカイブズの構造認識と編成記述



絵が物語る日本



図説江戸の「表現」

## 第 38 回国際日本文学研究集会

## The 38th International Conference on Japanese Literature

当館では、日本文学研究者による研究発表・討議により、広い視野からの日本文学研究の進展を図り、研究者相互の国際交流を深めるため、国際日本文学研究集会を開催しています。

平成26年度は、以下のとおり開催します。

- 日 程：平成26年（2014年）11月29日（土）～11月30日（日）
- 主 催：大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国文学研究資料館
- 会 場：国文学研究資料館
- 内 容：①研究発表  
②ショートセッション発表  
③ポスターセッション発表  
④シンポジウム（テーマ「図像の中の日本文学」）
- ※研究発表者及び研究発表表題については、9月下旬頃までに決定し、プログラムを当館ホームページにて公開する予定です。

使 用 言 語：日本語

### 参 加 要 領

参 加 費：無料

参 加 資 格：日本文学に関心のある者（研究者・大学院生・学生・留学生など）

申込み方法：参加の受付は当日会場で行います。

### 問い合わせ先

国文学研究資料館 国際日本文学研究集会事務局

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

TEL：050-5533-2911

FAX：042-526-8604

E-mail:icjl@nijl.ac.jp



平成 25 年度研究発表



平成 25 年度ポスターセッション



## 総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

### ○入試説明会のお知らせ

平成26年10月25日(土)13時30分より、当専攻の入試説明会を行います。入試説明会では、当専攻や入学試験についての説明のほか、大学院生が使用する施設、普段入れない書庫の見学、特別講義の聴講があります。事前申し込みは不要ですので、興味のある方は、是非ご来館下さい。

13時30分～ 専攻、入試についての説明

14時00分～ 総研大施設、図書館書庫等案内

14時30分～ 現役院生との懇談

15時00分～ 特別講義「本歌取り成立前史」

(小山順子総合研究大学院大学日本文学研究専攻准教授)

16時30分～ 大学院担当教員研究室訪問

〔概要〕 課程：大学院博士後期課程 学位：博士(文学) 募集人数：3名

〔願書受付期間〕平成26年11月28日(金)～12月4日(木)

〔選考方法〕修士論文等の審査、面接(平成27年1月29日、30日予定)

### ○修了生便り「大学院を修了してから」

島根大学教育開発センター 専任講師 七田麻美子

日本文学研究専攻在学時、私は日本漢文の研究を行っていました。主に平安後期儒者の漢文から見えてくる、当時の文学事象を研究対象としていました。地味ながらも、未開拓な文章を踏破していく興奮を味わえる、幸せな研究生活でした。

学位取得後の修了間近の頃、メディア社会文化専攻所属の後輩から、青山学院大学ヒューマン・イノベーション研究センター研究員の仕事を紹介されました。内容はeラーニングの学習支援の研究で、分野は教育工学です。在学時に、eラーニング制の高校で働いていたので紹介していただいたのです。しかしこの分野は、研究も実践も日が浅く、高校での指導も試行錯誤が続いていました。自分自身でもeラーニングの更なる勉強の必要性を感じていたところでした。幸いにも、高校でのeラーニング実践経験者は稀有でしたので、採用していただけたのだと思います。

昼は教育工学、夜は文学と研究時間を分けて、青山学院大学ヒューマン・イノベーション研究センターで研究活動をしていたところ、今度は、教育工学と人文科学とを一緒に研究できる人はいないか、というお誘いの声がかかり、現在の島根大学教育開発センターに任期付きで就職することになりました。現在の仕事は、地域の文化的・社会的資源を活用し、地域課題の解決に資する人材育成プログラムの開発をするものです。教育工学と人文科学双方の知識が必要な仕事です。更に教養教育の学習プログラム開発など、新しい研究分野の勉強も必要になっています。授業を行い、研究・プログラム開発もするという生活で、なかなか漢文をじっくり読めないのが辛いです。しかし自分に課した、文学研究と教育の融合を考える仕事ができるのは幸せと思いつつ毎日を過ごしています。

(七田さんは7月から総合研究大学院大学学融合推進センター特任准教授として、総研大本部に採用されました。)



研究発表する七田さん

8月						
日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24/31	25	26	27	28	29	30

9月						
日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

10月						
日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

- 開館：9：30～18：00 ●請求受付：9：30～12：00、13：00～17：00 ●複写受付：9：30～16：00  
 ただし、土曜開館日は、  
 ●開館：9：30～17：00 ●請求受付：9：30～12：00、13：00～16：00 ●複写受付：9：30～15：00

## 表紙絵資料紹介

### 小倉 擬 百人一首 (当館蔵 請求番号 ヌ3-231-1～104)

大判錦絵揃い物104枚。縦37.2cm×横25.6cm。弘化3年(1846)頃制作。江戸・伊場屋仙三郎板。絵師 一柳斎広重・一勇斎国芳合作。柳下亭種員序文。

小倉百人一首の歌の一部分を、伝説や演劇に登場する人物に見立てたもの。題字、目録、種員の序文と、天智天皇の歌の図が2種類あるため、合計104枚になる。

掲出の天智天皇歌の図は『浮世絵擬百人一首』(吉田幸一・倉島須美子、笠間書院、平成14年・2002・刊)所収の同揃い物の中には見られない。2種類の図はどちらも「秋の田のかりほの庵の苫をあらみ わが衣手は露にぬれつゝ」を御曹司牛若丸に見立てたもの。柳下亭種員による説明文「(源 御曹司) 牛若丸一年奥羽へ下り玉ふ頃 三河国矢矧の長が家に止宿し 娘 浄瑠璃姫と糸竹を合曲深く契りをはせしことは 世の人能知る所なり」も、( )内が書き加えられたのみで、ほぼ等しい。和歌の「わが衣手は露にぬれつゝ」を、『浄瑠璃御前物語』の、夜再び浄瑠璃姫の許へ忍んだ牛若丸の袖が、夜露に濡れている様に見立てた。掲出図には後ろに立つ男が描き加えられ、牛若丸は邸を振り返る構図である。浄瑠璃姫と契りを結び、金売吉次とともに奥羽へ下る所か。一方参考図の牛若丸が一人で描かれる場面は、邸に忍び入る所か。



(参考図)



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構  
**国文学研究資料館**  
 〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3  
 Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

発行日 平成26年(2014)8月1日  
 編集 国文学研究資料館広報出版部  
 印刷所 睦美マイクロ株式会社  
 ©人間文化研究機構国文学研究資料館